# 『日本語の「φ」という限定辞』

アントニオ・ルイズ・ティノコ

## 0．序論

「限定」（determination）という概念は、自然言語においては非常に大切な役割を果たしている。「限定」の研究は、特に冠詞の用法であるが、冠詞がないと言われている日本語の場合は、それがどのように行われているかを、本研究で考えていきたいと思う。特に修飾されていない名詞の働きがまだ明らかではない。ヨーロッパの言語とかなりの相違がみられるが、普遍的な面もあり、「限定」の理論へ貢献するところがあるのではないか、と私は思う。

## 1．「φ」という限定辞．

一見して、日本語では、限定辞のない名詞句が多くみられるが、これらがどのように「限定」されるかが本研究の主眼である。そのために、日本人に愛読されている、夏目漱石の『坊っちゃん』（1）から例文を引用し、その説明をしていきたいと思う。また、この『坊っちゃん』の中の例文は、コセリウに「周辺領域」（entorno）（2）と呼ばれている状況の中で解釈しなければならない。それは、状況を持たず、根拠を持たない談話はないからである。

### 1．1．「ひっかかり」の働き．

Hawkins（3）の用語では、trigger であるが、associative anaphora（連合照応）とも言う。Hawkins によると、

> It appears that the mention of one NP, e.g. a wedding, can conjure up a whole set of associations for the hearer which permit the bride,

the bridesmaids, etc. I shall refer to the first NP as "the trigger", since it triggers off the associations, and to first-mention definite descriptions which are dependent on this trigger as "the associates".

この「ひっかかり」の性質を調べるのには、『坊っちゃん』の出現順により例文を挙げていく。特に無形の限定辞「φ」（ゼロ）（つまり、修飾されていない名詞句）を注意したい。

「坊っちゃん」が卒業し、校長に呼ばれる。

（1）　．．．四国辺のある中学校で数学の教師がいる。φ月給は四十四円だが．．．

「坊っちゃん」がその「四国辺の中学校で数学の教師」という仕事を受け、次の例文中の「φ」との「ひっかかり」となる。

（2）　φ学校はきのう車で乗りつけたら、大概の見当はわかっている。四つ角を二三度曲がったらすぐφ門の前へ出た。φ門からφ玄関までは御影石を敷きつめてある。

（3）　名刺を出したらφ校長室へ通した。φ校長は薄ひげのある、色の黒い、目の狸のような男である。

（4）　．．．φ辞令を渡した。

（5）　φ校長は今にφ職員に紹介してやるから．．．この辞令を三日間φ教員室へ張り付ける．．．

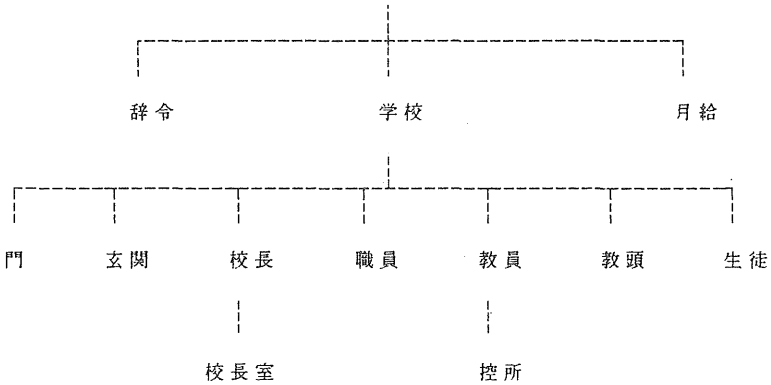
（6）　φ教員がφ控所へそろうには一時間目のラッパが鳴らなくてはならぬ。

（7）　おれみたような無鉄砲なものをつらまえて、φ生徒の規範になれの．．

（8）　挨拶をしたうちにφ教頭のなにがしというのがいた。

このように、教師の仕事があれば、その辞令、月給、学校などがある。さらに、学校には、門、玄関もあり、校長、職員、教員、生徒、教頭などがいる。そして、校長がいるならば、校長室があるように、これらの名詞は「ひっかかり」関係にある。

「四国辺の中学校で数学の教師」




1．2．「φ」の範囲・特徴．

「〜の〜」という部分を表わす関係は「ひっかかり」の範囲を決める1つのかぎであるが、これだけではないようである。例えば、「φ教員」なら「教員全員」を指す。複数の「φ生徒」の場合も「生徒全員」を表す。単数の「φ校長」の場合はその1員を表す。「φ」という限定辞の範囲は、部分を表さないと言える。

また、「寝る」という動作のひっかかりの範囲には、「床」、「寝巻」、「布団」、「枕」などそれぞれ1人分1組という関係と考えられる。例えば、

(9)　．．．寝られないまでも、φ床へはいろうと思って、φ寝巻に着換えて、φ蚊帳をまくって．．．

(10)　．．．φふとんの中から、バッタが五六十飛び出した。．．．いきなりφくくり枕を取って、二三度たたきつけた．．．

しかし、以上の例文（9）の「蚊帳」と例文（10）の「くくり枕」は、「寝る」という動作の範囲に入るとは限らない。必ず「寝る」時に「蚊帳」を使わないといけないことはないだろうし、「くくり枕」でなく、他の枕の種類を使ってもいいわけである。そういう意味で、例文中の「φ蚊帳」、「φくくり枕」という名詞句は、ひっか

かり関係になっているとは言えないので「不定」と判断してもよさそうであろう。が、日本の習慣（周辺領域の１部）を知っていて、夏には蚊帳がよく使われることと「くくり枕」を使う人がよくいるということを判断したら、「定」と解釈してもよいのではなかろうか。ここでは、「定」と「不定」の概念について Jiri Kramsky（１９７２）と同様に、

> By the term "determinedness" we understand the fact that nouns are classified according to whether the content expressed by the noun is clear and identifiable in a concrete way or not. In topical utterances this category is realized in the positive case by "determinedness", in the negative case by "indeterminedness".

つまり、話者（作家）と聞き手（読者）との「共通知識」が利用されているということである。もし、聞き手（読者）が学校に教頭がいるということを知らなければ、その「φ」という限定辞の効果がなくなる。そのために、「φ」の解釈は客観的だけではなく、主観的でもあると思わざるをえない。

ほかの例を見てみよう。

(11)　φ親譲りの無鉄砲で子供の時から損ばかりしている。
(12)　．．．φ二階から飛び降りて一週間ほどφ腰を抜かしたことがある。
(13)　新築の二階からφ首を出していたら．．．
(14)　小使におぶさって帰って来た時、φおやじが大きな目をして．．．
(15)　これはφ命よりだいじな栗だ。

例文（11）～（15）で分かるように「話者自身」が「ひっかかり」となっている。例えば、（11）の「φ親譲り」は「私の親」を指し、「φ腰」、「φ首」、「φ命」は、「私の腰」、「私の首」、「私の命」という解釈もできるし、「φ二階」の場合は、「その時私がいた家の二階」というふうに解釈できる。

また、次に例えばすべての学校に「宿直」があるとは限らないので、もし聞き手がその具体的な学校を知らなければ、話者は前もってそれを紹介しなければならない。

例えば、

(16)　φ学校にはφ宿直があって．．．φ宿直部屋はφ教場の裏手にあるφ寄宿生の西はずれの一室だ。

例文（16）では「φ宿直があって」と紹介され、それから「φ宿直」と「ひっかかり関係」にある「φ宿直部屋」を「φ」で限定する。このように、発話に出現する新しい要素が「ひっかかり関係」であれば、「φ」でもって「定」と限定され、そうでなければ「不定」と限定される。また、新しい要素を紹介することにより発話が展開していく。

以上で見たように「～の一部」という関係も大切であるが、ほかの関係もある。つまり、ここで言っている「ひっかかり」という関係はＮＰではなくてもよい。状況そのものが「ひっかかり」になる。そして何のlinguistic referent も出現しなくてもよさそうである。

## ２．「φ」と「周辺領域」.

日本語では、ある名詞句が「定」であるか「不定」であるかを曖昧に、「文脈による」とよく言うが、ここではCoseriu （４）の「周辺領域」の理論を応用し、「φ」という限定辞は「周辺領域」（文脈）とはどういう関係があるかを調べてみたいと思う。

### ２．１．「φ」と個別言語的文脈.

言語活動において、すべての言語記号が具体的な意味を持つのは、その具体的な言語の複雑な意味の対立、記号の関連、言葉の遊びなどのためである。これは、本研究の範囲に入らないので、触れないことにする。

### ２．２．「φ」と言語的文脈.

言語的文脈は、発話自体そのものであり、また、発話のそれぞれの部分が、その発話の「周辺領域」として「文脈」になる。従って、すでに言ったことではなく、発話

の中で後に言うことも含まれている。Coseriu が言語的文脈をさらに直接的あるいは間接的に、そして、積極的あるいは消極的に分類したが、「φ」以外になるので、本研究の対象にならない。

2．3．「φ」と言語外的文脈．

言語活動において、言わなくても得られる情報や、理解できることが多い。当然、こういう言語外的文脈は「φ」という限定辞との関係が重要なので、詳しく見ることにする。

2．3．1．「φ」と物理的文脈．

眼前にあるすべてのものを指示詞、所有詞などで限定することができるが、「φ」という限定辞で限定することもある。例えば、そばにいる学生の持っている一冊の和西辞典を指で指して、

(17)　その辞典を貸してください。

(18)　φ辞典を貸してください。

と、両方の表現ができるが、もし辞典を2冊以上持っていたら、「どれ？」と聞き返すであろう。それは、物理的文脈がはっきりしていたら「φ」で「定」と解釈できるからである。また、1冊だけならば、その1冊を指し、2冊以上ならば「すべての辞典」を指すので、充分な情報が伝えられていないと判断し、その「足りない情報」を相手に聞くことにより得ようとするからである。

2．3．2．「φ」と経験的文脈．

眼前になくても、話者と聞き手の両者にとって、すでに経験したことから成り立つ。例えば、

(19)　「それで赤シャツは人に隠れて、温泉の町のφ角屋へ行って、芸者と会見するそうだ」
「φ角屋って、あの角屋か」

「宿屋兼料理屋さ。だから．．．」

（19）の「φ角屋」は、「φ」だけで限定できるのは話している２人の両者が「事物」の状態を識っているからである。

２．３．３．「φ」と自然的文脈．

自然を表す語彙は、その実物が１つしかない時に、「φ」で限定できる。例えば、

（20）．．．きれいな刃をφ日にかざして．．．

（21）　相変わらずφ空の底が突き抜けたような天気だ。

（22）　廊下のはずれからφ月がさして．．．

（23）　頭の上にφ天の川が一筋がかかっている。

のように、「φ日」、「φ空」、「φ月」、「φ天の川」など「φ」で限定されることが多く、固有名詞と考えられる場合も多い。また、自然の一部であっても、「φ山」、「φ川」、「φ木」などは物理的文脈により限定されるか経験的文脈により限定されることが普通であろう。つまり、「眼前の川」、「私達の知っている川」、「この村の近くに流れている川」というふうに解釈される。

２．３．４．「φ」と実践的（または臨時的）文脈．

談話が行われる時に一連の文法的、意味的機能が、その「機会」に依存している。例えば、１００円の物を売っている具体的な店の人に「１００円のを１つください」と、言うならば、その内容がはっきりする。呼格の場合は普通「φ」で限定される。例えば、

（24）　．．．バッタを床の中に飼っとくやつがどこの国にある。φ間抜けめ。

この例文では誰が「間抜けめ」であるかがはっきりしているのは、実践的文脈がはっきりしているからである。

２．３．５．「φ」と歴史的文脈．

日本の「佐藤、斉藤、犬の糞」ということわざが表現するように固有名詞は１つのものしか表せないということではないが、歴史に属している人物・出来事などは一般的に固有名詞として扱われている。こういう固有名詞は１つのものしか表せないので固有名詞となるのではなく、歴史的文脈により共通知識の範囲に入るので限定されるのである。例えば、次の例では「φ」で限定される。

（25）　自分とおれの関係をφ封建時代の主従のように考えていた。

（26）　．．．馬車に乗ろうが、船に乗ろうが、φ凌雲閣へのろうが、到底寄り付けたものじゃない。

（27）　．．．幸いφ物理学校の前を通りかかったら生徒募集の広告が出ていたから．．．

凌雲閣とはに明治２３年浅草公園内に建てられた八角形煉瓦造りの塔であったことは一般的に知られていなくても、歴史的文脈に属していると「φ」で限定されることになる。また、この歴史的文脈を広い意味でとらなければならない。社会の仕組み、その特定の場所の歴史などを含まなければならない。歴史的文脈のために（27）の「φ物理学校」は、現在の東京理科大学だと分かる。

歴史的文脈のために、「φ天皇」のような固有名詞の解釈も容易である。「現在、昭和６１年」という歴史的文脈で表現するのなら、具体的な歴史的な天皇を指すことになる。

２．３．６．「φ」と文化的文脈．

文化は歴史、社会、習慣、宗教、文学などと深く関わっているが、文化こそ共通知識の範囲に入るわけである。

（28）　母が死んでから六年目のφ正月におやじも卒中でなくなった。

（28）の「φ正月」は、一般の日本人なら、いつからいつまで指すかは分かっているはずである。

2．4．「φ」と談話の世界．

ある特定の談話はある特定の意味体系に属しているということになる。例えば、

(29)　祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。

(30)　φ古池やφ蛙が飛び込んだりするのが精神的娯楽なら．．．

(29) のような文は「平家物語」の「世界」にのみ意味がある。「φ」という限定辞との関わり合いは、「ひっかかり」の関係が当然「世界」により違ってくるということになる。また、(30) の「φ蛙」は「どの具体的な蛙か」を聞く意味がないのは、「現実の世界」でなく、「芭蕉の俳句の世界」に属しているからである。

3．「φ」という限定辞の提案．

日本語の修飾されていない名詞は、「限定」上の共通の統語論・意味論的な特徴を共通しているので、方法論上では「φ」という限定辞により限定されていると扱っても便利であろう。この「φ」という限定辞は、「定」あるいは「不定」という機能を合わせ持ち、その機能は、その名詞とその「周辺領域」で決まるようである。(5)

まず、その本質を理解するためには、話者と聞き手の共通知識が表面化しなくても、その知識を利用することにより、発話に新しく出現していく要素の「限定」が行われる。しかし、自然言語の記号は、複雑な網の目のように結合している。その結合の「強化」(reinforcement ) の程度が個人により異なるので、「定」、「不定」、の認識も異なる。相撲の知らない人に「大乃国が大関になった」と話しかけてみても通じるはずがない。「大乃国」と「大関」の意味関係を教えて（紹介）はじめてその内容がはっきりする。

「ひっかかり」関係で結合された２つの要素（例えば、学校←→教師）は、「φ」で限定されるならば「定」となり、完全に結合されていない場合は「不定」となる。また、「定」になった場合は、例えば「φ教師」、「すべての教師」または「特定の１人の教師」の解釈になる。実際の発話の流れとしては、要素と要素の強化が強ければ強いほど「定」の表現がおよび「φ」の出現頻度が高まるであろう。

また、

(31)　学校へ行って、φトイレに入った。

(32)　学校で、ペンキ屋さんがφトイレを塗った。

(30)の「φトイレ」は、「学校のすべてのトイレ」とは解釈できないが、(32)の「φトイレ」は「すべてのトイレ」と解釈することができる。ここでは、私が呼んでいる「概念的限定」(conceptual determination)および「共同限定操作」(joint determinative operation)(6)というメカニズムで説明しなければならない。

基本的には、ある「φ」という限定辞を伴う言語記号$w_1$が他の言語記号$w_2$に「概念的限定」により限定されるには1つ以上の共通形成要素を有しなければならない。n言語記号の場合は、(31)の例文のように「学校」、「トイレ」、「入った」という、少なくとも3つ(n)の要素があるので、これらの要素の「共同限定操作」により、「不定」になる。つまり、「学校の1つかすべてのトイレか」の曖昧さをはっきりさせるのは3番目の要素「入った」である。もし、(32)のように「入った」という要素の代わりに「塗った」という要素ならば、「すべてのトイレ」になり、「定」の解釈になる。それは、普通、トイレへいく必要がある時に「1つのトイレ」に行くだけで用が済むが、ペンキ屋さんがトイレを塗る時に「すべてのトイレ」を塗ることが普通だからである。このように、ある発話の中の名詞句は複数の要素の「概念的限定」により限定されると言える。

## 4。結び.

「限定」(determination)という極めて抽象的な言語理論の問題は主に冠詞、数量詞の用法が研究の対象となるが、日本語にはヨーロッパの言語のような冠詞がないのが日本語の特色として今もって無批判に、あたかも定説のように繰り返す研究者が散見する。一般的には、「ハ」と「ガ」そして指示詞の研究に留まっている。しかし、日本語のような「冠詞のない言語」のあらゆる現象(限定のメカニズムについて)の説明は、特に修飾されていない名詞の働きの研究がまだほとんど行われていない。

本研究の主眼は、日本語の修飾されていない名詞の意味論上の特徴から言えば、方法論的にも「φ」という限定辞に限定されていると扱った方が利点が多いので、日本

語の「φ」という無形の限定辞を提案することであり、それと共に、そのごく基本的な働きを紹介したにすぎない。また、日本語に限らず、他言語の同類の現象（冠詞不在）を理論的に説明するのにも役立つと思う。

無論、こうした類の問題の性質のためにより深く迫る必要があると思うが、せめて叩き台の１つになることができればと思うのである。

【注】

1） 夏目漱石（1909）『坊っちゃん』、岩波文庫、第64（1981）印刷による。

2） 何かを言う時、言葉で表すことと実際に理解されたことを比較してみると、前者の方ははるかに少ない。それは、どんな言語活動にも「周辺領域」（entorno）があるからである。コセリウは、４つの「周辺領域」のタイプを区別している。ｃｆ． Ruiz Tinoco, Antonio （1983)。

3） ｃｆ． Hawkins, John A. (1978), pp. 123-130.

4） ｃｆ． Coseriu, Eugenio (1955-56)

5） 「ひっかかり」関係を理論的にさらに把握するために Ruiz Tinoco, Antonio (1985a,b) で「言語概念」を提案した。

6） 詳しくは、ｃｆ．Ruiz Tinoco, Antonio （1985a)

【参考文献】

Coseriu, Eugenio （1955-56）: "Determinación y Entorno. Dos problemas de una Lingüística del Hablar", Romanistisches Jahrbuch, VII(1955-56), p. 29-54. En "Teoría del Lenguaje y Lingüística General - Cinco Estudios", Tercera Edición Revisada y Corregida, 1978, Gredos, B.R.H., p. 282-323.

Hawkins, John A. (1978) : "Definiteness and Indefiniteness - A Study in Reference and Grammaticality Prediction", Croom Helm, London.

Krámský, Jiři (1972): "The Article and the Concept of Definiteness in Language", Mouton.

Ruiz Tinoco, Antonio (1983): 『日本語の「限定」ー統語論と意味論の接触』、東京外国語大学学士論文。

Ruiz Tinoco, Antonio (1985a): 「『言語概念』と『限定』」筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科中間論文。

Ruiz Tinoco, Antonio (1985b): 「言語記号は『概念』を表わしているのか」、言語学論叢、林四郎教授退官記念号、筑波大学一般・応用言語学研究室。

# EL DETERMINANTE CERO EN JAPONES

Antonio RUIZ TINOCO

La ausencia de artículo es una de las características de la lengua japonesa, y el estudio de la determinación, aparte de los demostrativos y los cuantificadores, se ha venido centrando en las partículas (postposiciones) "wa" y "ga", dejando de lado el estudio de la determinación del nombre sin determinante.

En este estudio, consideramos el tratamiento de un determinante "cero" y sus características semánticas, para explicar el funcionamiento a veces "determinado" y a veces "indeterminado" del nombre sin determinante.

Por medio del concepto "hikkakari" (ampliación del concepto anáfora asociativa) que proponemos, hemos logrado una explicación provisional del fenómeno. Por otra parte, su complejidad nos ha llevado a revisar el concepto de "determinación", que hemos tratado anteriormente en un estudio independiente, y que creemos válido y ampliable a otras lenguas tanto con artículo como sin él.